

▶香港カンフーなにするものぞ！ まわし蹴りで徹底的に攻めまくる岸選手。



【カンフーのこと、骨折のこと】

岸 信行

●個性を活かした空手を

自分の場合、技や構え、あるいは試合時における態度や闘いぶりなどに華麗さや巧緻さがないことはじゅうぶん承知している。要するに地味で一本気なのである。

空手の門にはいった当初、正直いって自分も、華麗さや巧緻さに10代の若者らしいあこがれをいだいた時期があった。だが何年か空手に打ち込んでいるうちに、自分は自分なりにもってうまれた素質や個性を活かしきるほうが正しい、

と自覚するようになっていた。その結果が、今日の自分の型である。そのように自分は空手について、個人的には自分なりの型をなによりも大事にしながら伸ばしていきたいと思う。しかし同時に、マス・大山門下の極真会館の一員たる誇りと自覚は、かたときも忘れたことがない。いかなる修行の場でも、いかなる試合の場でも、まず

●わが死闘の記

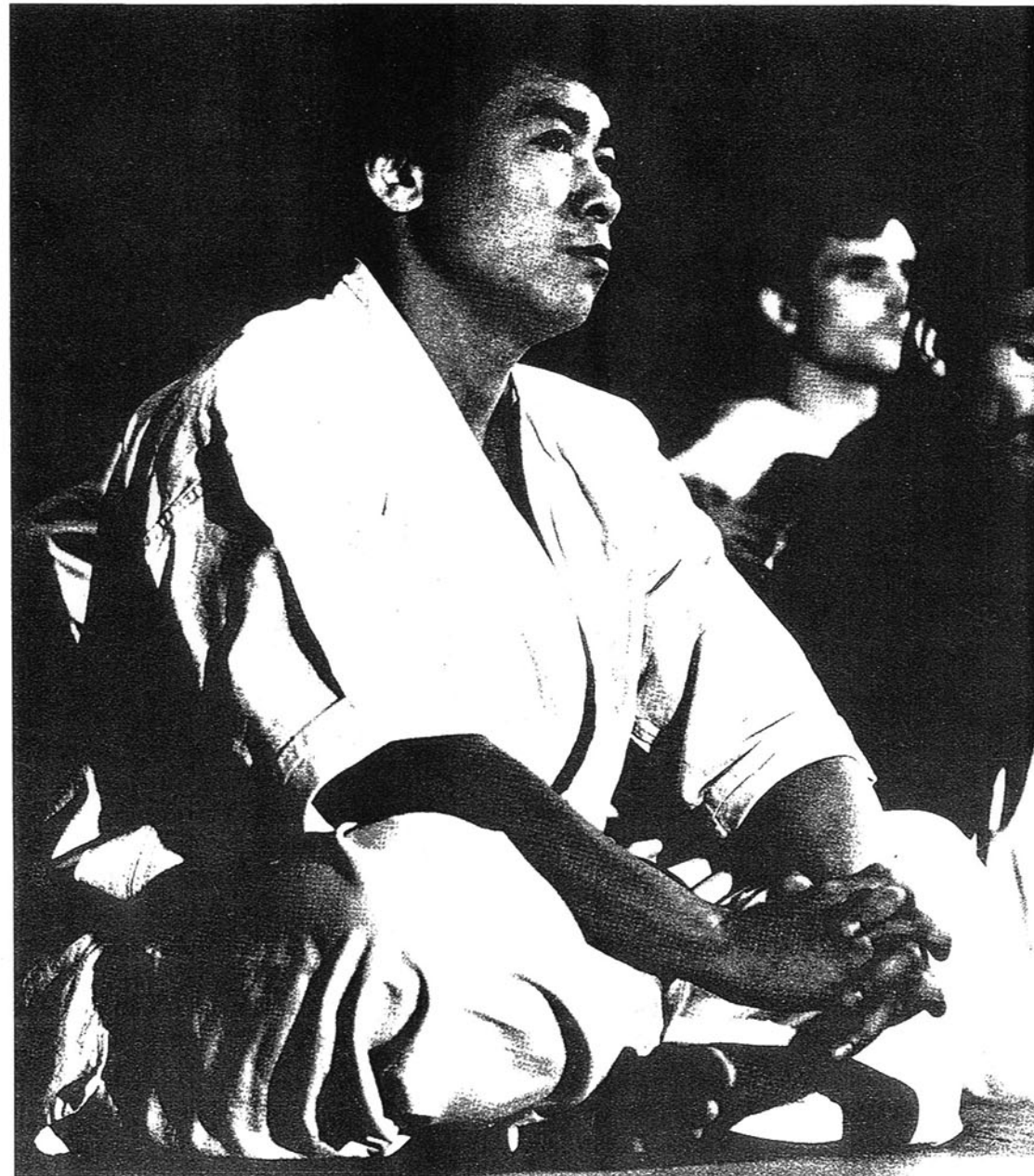
はじめに決める心構えは「極真空手の名を恥ずかしめまい」の一点に集中しているつもりだ。

●対カンフー戦

その意識は、絶対に間違っているとは思っていない。ただその意

識が、あの大会の第1回戦においてはいささか過剰になっていたことも事実である。相手が香港の「カンフー」選手だと決まった時点から、自分の闘志はいやが上にもかきたてられ、いまにして思えば異常なまでに高ぶっていたようだ。

「カンフー」は周知のとおり、アメリカや香港ではさいきん急速に関心を集めつつある空手の一種である。空手国際化、空手実戦化のパイオニアたるわが極真空手を当面の目標としており、あえていえば宮本武蔵にたいする佐々木小次



精神面の充実こそ、大いなる飛躍がある。冷静に戦うことが、岸選手の課題であろう。



▲右腕は使えないが、左腕一本で大丈夫！ 闘魂みなぎる岸選手のエンビでの試し割り。

郎といった存在ともいえそうだ。それだけに、自分は意識過剰になったのだ。

そして「カンフー」と聞いて自分の闘志がかきたてられたのと同様に、挑戦する「カンフー」選手もまた「極真空手にひと泡ふかせてやる！」といった敵ガイ心を燃やしていたにちがいない。互いに意識過剰になっていたわけだ。だからマット上で相対した瞬間から、自分と彼とは目に見えぬ火花を散らさざるをえなかった。

結果的には、自分は「カンフー」に勝つことができた。それは嬉しい。しかしいまにして反省するのは、やはりあまりにも意識過剰になりすぎて、試合の終始、自分は克己の精神を見失って闘ったのではないかということである。

なにがなんでもスカッとした「1本勝ち」で勝負を決めよう、そうおもえばおもうほど自分は日ごろ

の自分を見失い、自分の技の特徴をフルに発揮することができなかった。

最初の3分間で「判定勝ち」。しかしより明確に結着をつけるべく延長戦をせよ、との館長の指示にしたがってさらに3分間の激闘。かなり圧倒的な「優勢勝ち」をおさめたとは確信しているが、ついに鮮やかな「1本勝ち」を決めるにはいたらなかった。

あまつさえ自分は、勝ちを焦ったがゆえのやや強引な突きによって、右手親指を骨折してしまったのだった。

●精神面の充実を

そのため、2回戦以後においては自分の最大の武器である正拳が使えず、勝負でこそ負けはしなかったものの、3回戦では不覚にも「反則負け」を宣せられてしまった。親指骨折による精神の動揺が、

犯すべからざる反則を犯させてしまったのであろう。

せっかく代表に選ばれ、アメリカでの合宿訓練では諸先輩や同僚たちの指導をわずらわせながら、不覚のアクシデントで期待にこたえられなかった自分。

「カンフー」に勝った喜びよりも、そのほうの11惜しさのほうが自分にはつよいのである。

いまはまだ、ひたすら次の世界大会への出場をめざして、技・体のみならず、より精神面での不動心を鍛えあげようと、稽古に汗を流している自分である。

●岸 信行 (きし・のぶゆき)
昭和23年6月、山形県出身。168cm, 75kg。空手歴8年、4段。第1回世界大会では骨折のため、勝負をあせり不運の反則負けを喫した。現・北米指導員。